

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第41号 2024年10月31日 発行

目次

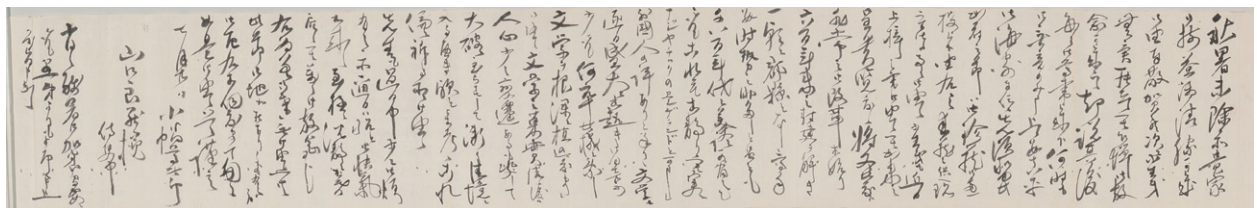
* 所長就任にあたって (西沢直子) …………… 2	* 2024 年度中津市アーカイブズ講座 …………… 7
* 熟語辞典を編むということ (竹中龍範) …………… 3	* 『小幡篤次郎著作集』
* 小幡におけるトクヴィル、スペンサー、ミル、 ウェイランド (安西敏三) …………… 4	第4巻・第5巻の刊行 (西沢直子) …………… 8
* 辞書! 辞書! 辞書!! (山根秋乃) …………… 5	* 新収資料紹介 …………… 9
* 「番頭さん」の思想史: 『小幡篤次郎著作集』を めぐって (山尾忠弘) …………… 6・7	* 日本で韓国語を学ぶこと (関庚模) …………… 10・11
	* 主な動き …………… 11
	* センター諸記録 (2024 年 4 月～2024 年 9 月) …………… 12

『小幡篤次郎著作集』第4巻・第5巻の刊行

2022年3月から、慶應義塾および一般社団法人福沢諭吉協会の共同事業として刊行が始まった『小幡篤次郎著作集』の第4巻(『小学歴史階梯』『小学歴史』『小学地誌階梯』、諸文集Ⅱ)が2024年3月30日に刊行され、第5巻(『英式艦砲全書』『船用汽機新書』、書簡集)は11月25日に刊行の運びとなりました。残すところは年譜と索引、若干の参考資料を収めた別巻となり、年度内に発刊の予定です。



小幡篤次郎



上に掲げた書簡は、明治4(1871)年7月20日付で大阪の知人山口良蔵に宛てた小幡の書簡。廃藩置県直後に、600年来の封建制から郡県制への移行を「千八百年代之美談」と述べ、外国人によるアジアの英国との評価を伝える。また、この機に文学(学問)を根深く植込みたいと述べている(第5巻 pp.663～4)。



所長就任にあたって

西 沢 直 子

10月から所長に就任いたしました。定年退職までの1年半という短い期間ではありますが、ご指導ご鞭撻くださいますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

福沢研究センターとの出会い

私と福沢研究センターの出会いは、センターが設置された1983年4月まで遡ります。その年の3月に慶應義塾大学文学部史学科国史学専攻(当時)を卒業した私は、指導教授である河北展生先生のもとで、もう少し幕末政治史を学びたいと考え、その旨を先生にお伝えしたところ、創立125年および福沢諭吉生誕150年を記念した出版や行事が目白押しで、福沢研究センターでは猫の手も借りたいから、アルバイトをしながら勉強してはどうかとご提案がありました。当時はアルバイトの規制が緩く、月曜日から土曜日まで河北先生のゼミの時間を除き、ほぼフルタイムで働き、翌年大学院に進学すると、修士課程の2年間、やはりゼミと若干の授業時間以外はほぼ福沢研究センターで仕事をさせていただいて、そのまま常勤嘱託となりました。

アーカイブズとしての福沢研究センター

1980年代後半はまだアーカイブズに対する社会の認識は低く、慶應義塾でも、資料を保管するのに、くずし字の読解力や資料保存等に関する専門知識が必要であるとは考えられていませんでした。福沢研究センターも専任教員はもちろん、その他の専門職が配置される体制ではありませんでした。

しかし、所蔵資料の網羅的な目録がなく、収納場所等の情報が長年出納を担当されていた職員の方の頭の中だけにある状況では、せっかくの資料も研究のために十分に利用することはむずかしく、その方の定年退職が近づくにつれ、資料に関するデータの可視化は喫緊の課題になりました。また時期を同じくして、目録を作成すれば、福沢家から福沢諭吉の原稿や手紙をはじめ膨大な資料が寄贈される運びになりました。そこでまだ20代半ばであった私が、何名かの司書資格をもった臨時職員の方にお手伝いいただきながら、資料カードと目録の作成に取り組むことになりました。

福沢研究者でも慶應義塾史研究者でもなかった私が、なぜ担当することになったかと言えば、今では問題ですが、既婚女性であったからです。1年契約で昇給等もなく、学校側の都合でいつ解雇になるかわからない、幸い私は夫があるからという理由でした。のちに福沢諭吉が女性にも経済的自立の機会を与えるべきだと述べていたことを知り、複雑な思いになりました。

話しが横道に逸れました。つまり私は、資料保存機関としての側面から福沢研究センターに関わるようになったと言えます。1990年代半ば以降、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会等の熱心な活動や、様々な分野で説明責任が問われるようになって、アーカイブズの存在意義が認められるようになりました。慶應義塾内でも他部署から福沢研究センターへの資料移管も増え、大学アーカイブズとしての役割も整ってきました。同時に、資料の収蔵場所や整理を担当する人員不足は深刻化しています。

特色としての学際性、実証性

2005年に専任のポストを得、より多くの、特に対外的な活動が可能になりました。福沢研究センター設置講座等を通じ多くの学生たちと共に考える機会が増え、また海外の研究者との交流が、研究所としての部局間協定に繋がりました。中津市とも、新中津市学校を拠点に共催行事や共同研究を行っています。

福沢研究センターの発足時、先生方が尽力されていたことのひとつに、学部間のバランスがありました。専門分野によって、研究手法はかなり異なります。福沢研究あるいは慶應義塾史研究がある方向に偏らないよう、学際的な共同研究を目指されていました。残念ながら、近年歴史を専攻する学生は減少する傾向にあり、現在は学部の偏りが無いとはいえません。バランスが取れるように働きかけ、学際性の維持に努力したいと思います。

またアーカイブズとしての側面をもつ研究機関として、研究における実証性を守っていきたいと考えます。福沢研究センターは、福沢諭吉や慶應義塾に関して、耳障りをさけ心地よい話だけを発信する機関になってはならないと思います。人は時代から切り離されて存在はできず、ましてや人間交際を重んじた福沢であれば、その考えに時代的制約を受けるのは当然であると考えます。

国際交流においては、これまで積み上げてきたワークショップや短期研修等を、特に若い研究者が、資料を共有しながら実証的な研究を進められる場として発展できるよう、道筋がつけられればと考えています。それは福沢諭吉が描いていた、「真の学者」をつくる交流の姿でもあると思います。

育児による6年程の空白はありますが、発足時から仕事をさせていただき、はじめての専任教員である私だからできることを考えながら、研究機関としての矜持を持って務めさせていただこうと思います。

福沢研究センターに対するみなさまのご支援をお願い申し上げます。

熟語辞典を編むということ

—小幡篤次郎・小幡甚三郎編『英文熟語集』の場合—

元・香川大学教授 竹 中 龍 範

辞書を編むと言うとき、それは多くの場合に、同種の既刊辞書を参照して行われるのが一般的である。ただ、そこでその先行辞書に対する謝意がどのような形で表されているかはさまざまである。殊に、英和や和英と言った一般の語彙を収める普通辞書の場合は、恣意的に新たな訳語を造り出すわけにもいかないため、どの辞書がどの辞書から採っているかを同定することは難しい。

これに対して、熟語や語源、発音など、ある言語の特殊な分野を専らに扱う特殊辞書の場合には、各分野のバイオニア的辞書の編纂において利用し得る先行辞書は、通例は、ないということになる。ただ、熟語辞典の場合には、熟語が普通語彙の一部として認識されているために、普通辞書たる英英辞典や英和辞典から拾い上げることも可能である。したがって、全く無から有を生じさせる手続きにはならない。もちろん、普通辞書中に或る熟語の定義を見出すためには自らが読書を進めるなかで解釈し難い箇所が熟語であることを見抜かねばならない。当該の表現について、それを構成する各語の意味の総和を求めても、それをいかようにつなぎ合わせようとしても、前後の文脈からはその部分が浮いてしまい、意味解釈をやり直さねばならなくなることに気づくことが必要になる。その際に、既存の辞書にその表現が載っていればそれを採って解釈を進めることができる。『英文熟語集』から一つ例をとってみよう。「解題」にといった例から「Age; — of consent. / 婚姻スヘキ年齢 對稱」の場合、文字通りの意味は「同意(の)年齢」となるが、これだけでは何に対する同意なのかが不明である。ここで小幡は「ウェブストル氏字典」によって‘Age’を引いてみる。するとそこには‘Age of consent to marriage is fourteen in males, and twelve in females.’とあって、結婚についての表現、すなわち「親の同意が無くても結婚できる年齢」であり、さらに、男性の場合にはそれが14歳であり、女性については12歳であるとの情報が与えられている。この男女の年齢について、「解題」では、アメリカが満年齢であるのに対して日本では数え年が用いられたことを斟酌したものと解釈しておいた。

もちろん、この手続きによってすべてが片付くわけではない。「往々浩瀚ナルヲ以テ搜索稍ヤ煩勞ナリ」(「英文熟語集序」)という点がありつつも「ウェブストル氏字

典」は小幡兄弟の信頼し得る情報源となっており、このほかにも幕府開成所の『英和对訳袖珍辞書』や英華字典をも参照していることは「解題」にて追究したところである。

これらの先行辞書に当該熟語が収載されていない場合には、小幡自らが前後関係を斟酌して和訳を与えるという手続きになる。その際、概念的に相当する表現が日本語に得られる場合にはそれを充て、それがない場合には適当な訳語を案出することとなる。これには相当なレベルの英語力、日本語力が求められる。これが英学研修4年目の学習成果である。驚くほかないと言えよう。

この英文読書中に熟語を抽出し、これを基に熟語辞典を編むという手続きによった辞書がわが英語辞書史上にもう一点あるので、これを紹介しておきたい。それは竹中(2007)に紹介・分析したJames Main Dixon編 *Dictionary of Idiomatic English Phrases, Specially Designed for the Use of Japanese Students*, (1888)である。その標題に記すように日本人学生の利用に供するべく編まれたものである。工部大学校からのち帝国大学文科大学に教えたディクソンは、日本人学生の熟語に関する知識の乏しいことを憂えて、彼らに英語の小説を読むことを勧め、そこに見られる熟語を拾い集めるとの作業を課した。そうして集まった熟語を集約して、定義・解説を与え、これに‘Good Prose [P]’、‘Conversational [C]’、‘Familiar [F]’、‘Slang [S]’のスピーチ・レベルを与えたうえ、さらに、引用例をも付して、辞書の形式に整えたものが本熟語辞典である。言うまでもなく、この課題をこなすために学生に求められた英語力は相応のものであったはずで、かくしてこの帰納法的熟語検出の成果たるディクソンの英熟語辞典は高い評価を受け、のちには英国版、さらには英漢対訳版もが刊行されて広く用いられた。小幡兄弟の『英文熟語集』と並べて再評価したい辞書である。

参考文献

- 竹中龍範(1982)「『英文熟語集』解題」復刻版『英文熟語集』別冊付録、あき書房;再録『福澤諭吉年鑑』47号、pp. 124-109.
- 竹中龍範(2007)「J. M. Dixonの英熟語辞典をめぐる」『英学史研究』第40号、pp. 23-35.



小幡におけるトクヴィル、 スペンサー、ミル、ウェイランド

福沢研究センター客員所員 安西敏三

1979年8月15日、九州一円の福沢の事跡を訪ねる途中、中津市立小幡記念図書館に立ち寄った。9時30分から7時間余り、A. d. Tocqueville, *Democracy in America*, Translated by Henry Reeve, Edited, With Notes by Francis Bowen, Vol. 1. Fourth Edition, Cambridge: Sever and Francis, 1864とHerbert Spencer, *Education: Intellectual, Moral, and Physical*, New York: D. Appleton and Company, 1860の二書を閲覧し、小幡の手になると思われるノートをフィルムに収めた。トクヴィル民主政論のリーヴ英訳・ボーエン補訂第一巻には六ヶ所文上に朱筆傍点が見られた。「結社の自由な国に秘密結社はない」がその一である。次いで結社の権利の理解と行使の欧米比較である。自由が放縦化する英国を除く欧州では結社を俄か造りの編制部隊のように考えるが、米国では多数派の精神的権威を弱める為である。「欧州では多数派とかけ離れ支持を得ることが望み薄の政党がある。」そして「大政党が多数を占めることが明らかになるにつれて結社の権利行使は危険を伴う。」さらに「自由への経験不足が結社の自由を政府への攻撃の権利としか見なさないようになる。」また「結社の主な目的は論争ではなく行動であり説得よりも戦いである。結社は自ずと市民的でも平和的でもなく軍事的生活の習慣や方針に与る組織を受け入れる結果となる。」加えて「結社が行なう圧政的統制は往々にして結社が攻撃する政府の結社への統制権力より耐え難い。」小幡が訳出した出版自由論や政権治権論、さらに合衆国の権利の観念についての箇所にノートはなく、閲覧したものとは別種とも思われるが、上梓した出版自由論の次章でもあり、結社の自由が出版の自由よりも影響力があり、欧米比較論からその危険性も認識した上で翻訳を念頭に置きつつ読み進んでいたのではなかろうか。著作集第二巻に不在が指摘されている中津図書館旧蔵小幡本から小幡の社会構想の一端が見えてこよう。

スペンサー『教育論』については渡辺徳三郎による紹介が既にある。小幡手沢本は総て毛筆による要約書き込みである。「教育ノ事ニ至テ尚虚飾ヲ先ニシ実用ヲ後ニス」。古典語の本質的価値よりはその無知が恥であり、それへの精通が社会的地位に通じ尊敬を得る証となる。つまり紳士教育の科目であり、生活様式や衣装などの誇示と同じく他の階層への支配手段と化している。「虚飾ヲ尚フノ起源ハ人ヲ制御セントスルニ在ル」である。問題は如何に生きるべきかである。それは「人事ノ大疑問」である。教育の目的は完全な生活を送る備えである。「教育

ハ人ヲシテ完全ナル生活ヲ得セシムルニ在リ。」そして重要な成果を生む五点を挙げる。「各編ノ諸勢力」である。自己保存に役立つ知識の重要性は「先ハ事物ノ理ヲ知ル事」であり、「次ハ活計ヲ学ブニアリ」と続く。家族の幸福に役立つ知識が社会に先んじて必要である。「第三マズ論ヲ調査設問シ世人ノ一人トナルニ在リ」である。小幡のノートが見られるのは最も価値ある知識はサイエンスと論ずる章である。小幡も福沢と共に宜なるかなであらう。

ところでスペンサーはJ・S・ミルと共にオーギュスト・コントの影響を受けている。福沢はスペンサー『社会学研究』読書において、宗教意識の持続性について「宗教ノ色ハサメルモ其種ハ消滅ス可ラズ」とスペンサーの意を汲んでノートし「覚書」にも記し、宗教進化論を具体的にメモして、「宗教は人間に必ず存して必ず滅す可らざるものなり。其要は之を改進せしむるに在るのみ」としているが、未来の宗教としてスペンサーは「人間性の宗教」(Religion of Humanity)を、コントの言う“Religion de l'Humanité”に倣って挙げる。著作集第二巻収録「教用論」(Utility of religion)小幡の序には、人を宗教以外に薰陶教化する「人道」は古代ギリシャ以外になかったとのミルの論に、「漢土孔孟の教」と「我武士道」が「我上等社会」にある日本は如何とある。「人道宗」を以てする人心の掌握は、日本にあっては自明と映じているのである。小幡の「人道宗」はミルの“the Religion of Humanity”である。小幡がミル宗教論を訳したのは明治11年前後である。福沢がミル功利論を読み「モラルサンクションハ人ニシテ人ナリト思フ一点ニテ沢山ナリ」と書き込み、「上帝論ノ極意ハ賞罰ノ外ナラズ賞罰ノ性質タルヤ決シテ美ニ非ズ余輩ノ心ヲ動カスニ足ラサルナリ」と結論づけるのは明治9年4月14日のことであった。この時、小幡は福沢と共に「人ニシテ人ナリト思フ一点」即ち「人道宗」に賭けていたのではあるまいか。

さて小幡と言えばウェイランド経済書である。雅俗混交文体をとる福沢に比し、小幡は漢文の素養宜しく格調高い文体である。福沢訳「学とは何事にても人知を以て造化の定則を發明し、此の定則の次序を正しく排列したるものなり」。小幡訳「学の義たるや人知の及ぶ所、何等の科業にても造化定極の法則にて首尾本末完備するものを云ふ」。文体の刪正も「理論の品価を増す」に関係するであろう。

* 7頁に資料情報があります。



辞書！ 辞書！ 辞書！！ —『小幡篤次郎著作集』の校正—

福沢研究センター研究嘱託 山 根 秋 乃

『小幡篤次郎著作集』の校正をお手伝いできるのはなんて光栄でしょう、と思ったのも束の間、いざ作業に取りかかってみれば、自分の力のなさを思い知らされました。と言うのも、とにかく漢字がむずかしい。漢文の素養に裏づけられた小幡の文章は、漢字も言葉も現代文とは違う難しさがあります。

『著作集』第1巻は「天変地異」「生産道案内」が漢字と変体仮名、「博物新編補遺」は漢字とカタカナで書かれています。明治初期のバージョンの漢字は現在では異体字（旧字略字俗字など）とされているものも多く、最初の原本入力で字体は凡例にそって常用漢字を基準に直して入力されます。この段階で異体字などはほとんど訂正されているのですが、校正ではその入力原稿を改めて原本と対照します。細かく見て行くと、似たような違う文字だったり意味の通じないところなどもあり、微細なチェックが欠かせません。これが思いの外難しく、特に漢字は述べたようにたくさんの字体があり、簡単そうできて少々やっかいでした。文字を決めるというこのひと手間が、最初の関門でした。

そして始めからつまづいたのが、私の辞書でした。漢字は『新漢語林』の見出し字を基準にすると言うので、家にある辞書で間に合うと安心していましたが、最初の打ち合わせでこれが使えないことが分かりました。私が俗字として訂正を申し出た漢字が、実は俗字ではなく基準に合っていました。これは何故かと言えば、所持していた『漢語林』が旧版で、新版では、その文字が俗字から基準となる見だし字に改訂されていたのです。早速新版を手に入れたものの、辞書の基準も変わっていくのだということを改めて知らされました。

さて辞書を整え文字を確定すればあとは意味を理解し読み進めるという段階のはずですが、簡単にはいきません。読めない漢字が多すぎて停滞する。がっかりしてため息をつく暇もないほど、次から次へと出てくる。そこで辞書！ 辞書を調べまくることになります。外国語の勉強以来、こんなに辞書をひいたことはありません。『新漢語林』で出てこない字は、古い漢和辞典まで総動員して取りかかりました。『大漢和』と『日本国語大辞典』は最後の手段として残し、とにかく手持ちの中辞典レベルで引きあさりました。これまで古い辞書が参考になることはほとんどなかったのですが、『新漢語林』で出ない熟語がうまく出てきたりすると面白くなって、古い

漢語？の珍しさをすこし楽しんだりしていました。しかし結局はこれでも不十分でした。いま普通には仮名で書く副詞や接続詞の漢字表記が難関でした。字の意味から読みが想像はできても確信が持てないので、辞書で確認したいのですがそれがなかなか出てこない。たとえば「輒もすれば」の訓読みは「やや」と読むのだろうと想像して読んでいましたが、この訓が『大漢和』でも確かめられない。ついに『大言海』で見つけてちょっと嬉しくなりました。

この校正作業のおかげで小幡の翻訳や著作のおもしろさに触れるという大きな収穫がありましたが、そのほかには、辞書のことがあります。初めて使った辞書が二つ。『字訓』と電子辞書です。『字訓』は、棚におかれたまま、背表紙を眺めていただけのものでしたが、漢字の訓があまりにも読めないの、ひょっとしたらと思い使ってみました。その訓読みを想像して引いてみると、ちゃんと出てきてくれたりするのが楽しく面白く、次々と当たってみたりしました。しかし、『字訓』は掲載の言葉数が少なく、限界があり、だんだん使わなくなりました。古い辞書もそのうちほとんど引かなくなりましたが、その原因の一つが電子辞書でした。2巻の校正にあたる頃に、センターから貸していただいたEX-wordです。笑われそうですが、気になりながら持っていませんでした。はじめはうまく使いこなせず2巻まではあまり役にたてませんでしたが、そのうち要領を得て、急ぐときにはなくてはならないものになりました。特に5巻の『英式艦砲全書』『船用汽機新書』では、つつい締め切りに迫られる事態となり、この時にはつくづく電子辞書の威力を痛感しました。紙の辞書を引く手間をかけては到底間に合わないときに、急いで校正を済ませることができました。本が汽船のエンジンや機器などを細かく説明する専門書に近く、内容の理解は少々雑駁でも編集段階のすりあわせで、訂正していただける、という安心感があってのことでしたが…。

今も確認できない文字の最後の切り札として頼っている『大漢和』ですが、まだ解決できていないものもあります。ノートに付箋のついたままの文字は機会をえて見残した辞書などで再調査してみたいものです。ようやく『著作集』も最終巻を迎えます。もうひと仕事。「辞書！ 辞書！ 辞書！！」を楽しみながらお手伝いしたいと思います。



「番頭さん」の思想史： 『小幡篤次郎著作集』をめぐる

大阪経済大学経済学部 講師
福沢研究センター 客員所員

山 尾 忠 弘

つい先日、昔から世話になっていた武道具店が倒産したとの知らせを受けた。老舗中の老舗であったが、少子化のあおりも受けたのであろう。私が世話になったのは先代の頃から暖簾を守り続けた番頭さんだった。義塾に在学・在職していた時分にも随分と可愛がってもらったし、大阪に居を移してから、道具の修理は番頭さんに任せたいと、出張のついでに土産と剣道具を持って立ち寄るのが常であった。商売の浮き沈みは世の習いと知りつつ、やはり寂しい。

さて、自分の教えている西洋社会思想史を振り返ってみると、出てくるのは英雄・偉人ばかりで、言ってみれば偉い「旦那衆」の思想史である。近年では思想史における女性の位置（あるいは地位）が問題になり始め、私もそのような問題意識を持つてはいるけれども、そちらも大部分が偉い女性の物語であって、何らかの意味で「偉大」なことは大前提である。しかし偉大な「旦那衆」、あるいは「女将さん」（という表現は当然適切でないが、ここでは差し当たり）の思想史ではなく、「番頭さん」の思想史を描くことはできないだろうか。

そもそもこの「番頭」という概念を翻訳すること自体が難しい。手近な和英辞典を引いてみたところ「番頭」の項目には“a head [chief] clerk; the general manager of a merchant business in pre-modern Japan”（『研究社新英和大辞典第5版』）とある。前近代日本（pre-modern Japan）と但し書きがついているところを見ると、編者も該当する英語に心当たりがなかったらしい。『日本国語大辞典』には「商家の雇人のかしらで、店の万事を預かるもの」との記載があるが、私の語感では、もう少し広い用法でも用いられているように思われる。ここでは商家に限らず、華々しい活躍をしたわけではないけれども、そのような活躍をした人の影で、欠くべからざる裏方を担った重要人物を「番頭さん」と呼んでおきたい。

西洋社会思想史における番頭さんとしてまず思い起こされるのはジェイムズ・ミルであろう（エンゲルスは「パトロン（支援者）」と言った方が適切である）。『自由論』などの著者として知られ、草創期の義塾の教育、そして何より福沢の思想形成に重要な影響を与えたことで知られるJ.S.ミルではなく、その父親である。今日ではジェレミー・ベンサム、デイヴィッド・リカードウ、そしてJ.S.ミルらの影に隠れて、英国思想史の専門家以外に名前を知られることは少ないだろうが、彼らの影で「番頭さん」として重要な役回りを担ったのは、このジェイムズ・ミルであった。

この点についてJ.S.ミルが貴重な証言を残している。「ベンサムは、私の父よりも、歴史上はるかに偉大な人物である。しかし、私の父は、個人的な影響力については、ベンサムよりもはるかに強大であった」（『ミル自伝』）。ジェイムズ・ミルが「番頭さん」であったのなら「旦那」はジェレミー・ベンサムということになるが、ベンサムがJ.S.ミルの言うようにあまり俗事の苦勞を知らず「最期まで少年であった」（「ベンサム」）のだとすれば、「番頭さん」の苦勞は推して知るべしである。実際、J.S.ミルの周辺にいて選挙法改正運動などの一翼を担った「哲学的急進主義者」にはジェイムズ・ミルの影響を受けた若者も多かったし、リカードウに経済学史上名高い『経済学及び課税の原理』を執筆させたのはジェイムズ・ミルだったと言われるから、彼がいなければその後の英国思想史の展開は異なるものになっていたかもしれない。

このようなことをもう少し学問的に考察するにあたって大きな障害となるのが、「旦那衆」については綿密な校訂を施された立派な著作集があるにもかかわらず、「番頭さん」にはそれが無いということである。J.S.ミルには全33巻に及ぶトロント大学出版局版『ミル著作集』が存在するし、ベンサムの方は決定版の著作集がフィリップ・スコフィールド氏らの手によって編纂されている。ジェイムズ・ミルについては随分昔に貧弱な著作集が出ている程度で、彼が若い頃に執筆したと思われる匿名論文の調査も部分的にしか行われていない。我が国には山下重一による記念碑的作品『ジェイムズ・ミル』（研究社イギリス思想叢書8、1997年）があり、その後の個別研究の展開にも見るべきものがあるが、残念ながらAntis LogidesによるJames Mill's Utilitarian Logic and Politics (New York: Routledge, 2019) に比肩する研究は出ていない。かくいう私自身も、ジェイムズ・ミル研究を進める際に優れた校訂を付した著作集があればと思うことは多い。福沢在世の頃に比べれば状況は大幅に改善されたとはいえ、極東の島国で西洋社会思想の研究をする人間にとって、史料に容易にアクセスできないという宿病が本質的に解決されたわけではないのである。

西洋社会思想史研究におけるこのような事情に鑑みると、福沢諭吉の「番頭さん」であった小幡篤次郎の『著作集』が刊行された（本稿執筆時点で四巻まで）のは誠に慶賀すべきことである。私自身、小幡の名前はJ.S.ミルの日本における最初期の（そしてある意味では最良の）紹介者として知っていただけに、刊行された『著作集』を興味深く読んでいます。私の専門的興味から、ミル『宗

教三論』の翻訳が収録されている第二巻と、ウェイランドの『経済学要綱』の翻訳が収録されている第三巻は、解説とともにとくに面白く読んだ。『著作集』の刊行が近代日本研究の進展に資することは言うまでもないだろうが、西洋社会思想の日本への導入・受容を研究する際にも必読の文献となるだろう。

さて、「番頭さん」の思想史である。小幡が福沢にとって欠くべからざる「番頭さん」であったことは言うまでもない。小幡の存在なくして、福沢はあれだけの仕事ができただろうか。今日の義塾の姿も、また違ったものであったかもしれない。ベンサムよりは福沢の方が世事に長けていたように思われるが、それでも「番頭さん」の苦労は大きかっただろう。恩師の一人が小幡の「頭髪後退」の責任は福沢にあるのではとこぼされていた。宜なるかなと思いつつ、残念ながら『著作集』を紐解いても答えは得られそうにない。

それでは、基礎資料としての本『著作集』の刊行が、小幡研究の一層の進展を促すであろうか。一般論として、基礎資料が整備されればその周辺に研究インダストリー

が出てくるものである。研究史を顧みて『ミル著作集』完結前後の J.S. ミル研究の成果には目を見張るものがあるし、前述の『ベンサム著作集』をもとにした研究は枚挙にいとまがない。しかし、「旦那衆」ではなく「番頭さん」の場合はどうであろうか。私自身、『著作集』に収録された小幡の作品を見て、たとえば第四巻に収録された「一夫一婦」と福沢やミルの女性論の対比は面白いのではないかと思いついたが、どうしても福沢やミルの受容者・解釈者という観点から描きたくなくなってしまう。もちろんそのような研究にも意義が認められうるだろうが、それではやはり「旦那衆」あつての「番頭さん」ではないか。「英雄」でもなく「民衆」でもなく、「旦那衆」の影には隠れたが、誰かがやらなければならない（ことによって損な）役回りを担って、歴史の1ページに刻まれた「番頭さん」の思想史を描き出せないものか。本『著作集』を紐解きながら、そのようなことを考えた。

*本稿の執筆にあたっては JSPS 科研費 (20H01481; 24K15920) の助成を受けた。

2024年度中津市アーカイブズ講座

本年度は、8月27日(火)から、8月31日(土)に実施された。例年通り、別府大学や久留米大学から大学生や大学院生が参加し、それぞれの大学の教員に加えて神戸大学、また慶應義塾からも教員および Teaching Assistant が加わって、資料の整理、保存、利用に必要なスキルを学ぶための講義と実習を行う予定であった。しかし、あいにくの台風10号の九州地方への接近、上陸により、予定の変更を余儀なくされた。

8月27日(火)の開講式および上記実習に関わるセミナー、28日(水)の「キリスト教文献の(内的)史料批判」(平井義人日出町歴史資料館長)「鯨と江戸時代人」(上野大輔慶應義塾大学文学部准教授・福沢研究センター所員)の講義および現状記録実習は、予定通り行われた。しかし翌29日(木)は朝から暴風雨で、当初は複写した資料を学生の宿舎に持参し、古文書解読の実習だけでも行うことを検討したが、強まる一方の風雨に教員も宿舎を出ることができず、実施を断念した。台風の進捗が遅く、翌日も同様の事態が予測されたため、教員および TA は終日、代替教材の確認や作成を行った。

しかし中津市内は予想よりは風雨が強まらず、30日(金)は宿舎からの移動が可能となった。そのため、急遽スケジュールを変更し、30日午前・午後、31日午前という3つの時間枠で、3班に分かれた学生が写真撮影、

襖の下張文書剥し、目録作成(古文書解読)の各実習を行うこととした。古文書解読は、本年度も中津藩の土士である梅田家の文書を取り扱い、慶應義塾の教員2名(上野、西沢)と、福沢研究センターから派遣された TA3名(岡部敏和、高野宏峰、横山寛)が学生の指導にあたった。時間は短くなったが、集中して古文書を読むことができ、例年と遜色のない実習になったと思う。

1つの講義(「中津藩の学問と教育」吉田洋一久留米大学教授)と福澤記念館の見学が実施できなかったのは残念であるが、短いながらも学生たち、あるいは教員や TA にとって有意義な時間となった。



*現在は『小幡篤次郎著作集』第二巻解題にもあるように、*Democracy in America* の第一巻は所在がわからず、第二巻のみが保管されている。

『小幡篤次郎著作集』第4巻・第5巻の刊行

西 沢 直 子

慶應義塾と一般社団法人福沢諭吉協会の共同事業として出版が進んでいる『小幡篤次郎著作集』は、2024年3月30日に第4巻を刊行し、11月25日には第5巻を発行する運びとなった(表紙参照)。

第4巻には、小幡が執筆した教科書『小学歴史階梯』『小学歴史』『小学地誌階梯』と、明治12(1879)年以降に新聞・雑誌に発表した論説や演説筆記等を収録した。

小学校向け歴史教科書の執筆動機について、小幡は『小学歴史』の自叙で「(既刊の教科書は)文学技芸の沿革に国の開明を発表するもの、及外邦と和戦交通の条項に国の独立を顕明するもの」が少なく、それらの記述を充実させて、初めて歴史書を読む者に「今日の文明開明由て来る所の本あるを識らしめ」たいと述べている。

最も早い『小学歴史階梯』の版權免許は明治19年4月27日付で、直後の5月10日に教科用図書検定条例が定められた。東書文庫には、検定意見が付与された『小学歴史階梯』『小学歴史』が残っている。『小学歴史』は初め『日本歴史』の表題で執筆し、おそらくは検定のため、柱は「日本歴史」のまま表題のみを変更して版權を取得した。初版刊行は『小学歴史階梯』が先であったが、検定意見を反映した版の発行は『小学歴史』が先で、但し212箇所、検定意見に対し、131箇所は元のままである。『小学歴史階梯』は「分立」としていた元号を南朝の元号に改めるなどの改訂を経て、明治24年8月に再版が刊行された。ただ再版の残存は少なく、管見の限りでは東書文庫および国立教育政策研究所教育図書館が所蔵する2冊のみである。

収録するにあたって、両著作とも、改訂箇所がわかるような表記を検討したが、紙幅の関係や読みやすさを考えると断念せざるを得なかった。今回は校正御届版や再版を底本として掲載している。検定意見では人名等の誤りが細かく指摘されているが、それでも刊行された本には誤りが見られる。既刊同様、編集過程では彫り誤りと判断される文字のみを正すにとどめた。

第4巻に所収した『小学地誌階梯』が、小幡が出版した最後の単行本になる。この本の存在は、これまで知られていなかった。子ども向けの教科書ではあるが、子どもを通じ親世代への感化も意図した構成になっている。

同巻に論説や演説筆記等を収録するにあたっては、小幡が役職上作成した文書や演説などを、どこまで収録するかが、むずかしい問題であった。明治13年になると交詢社が立ち上がり、小幡は幹事として様々な場面で演

説をすることになる。また23年3月には慶應義塾長になり(30年8月まで)、福沢歿後には社頭となる。編集委員会で検討の結果、本書は著作集であり全集ではないため、たとえば交詢社大会報告を掲載するか否かという判断ではなく、内容による取捨選択を行い、役職上のものであっても必要に応じて収録することにした。

第5巻には、単行本では『英式艦砲全書』および『舶用汽機新書』を収録した。後者は全4巻のうち小幡が翻訳を担当した1、2巻のみを収録した。同書には数式や図表が多く含まれ、収録は376頁に達した。2つの著作は艦砲の手入れや打ち方、あるいはエンジンの解説などが続く実用書で、『英式艦砲全書』は原典が不明だが、『舶用汽機新書』は、Richard Sennet による *the Marine Steam Engine* である。小幡は1882年版を訳しているが、1885年版と比較すると、後者は技術の進歩による変更点がかなり多い。とすれば、小幡訳はかなり短命であったかもしれない。

『英式艦砲全書』では、吉田賢輔の序文に小幡が「熊本藩嘱」と紹介されている。吉田との関係を考えればミスとは考えにくく、前年に同じく熊本藩から翻訳依頼を受けていること(福沢諭吉、小幡甚三郎と連名で『洋兵明鑑』を出版)とも合せて検討課題となろう。また『舶用汽機新書』巻之一は、横浜中央図書館所蔵本が最も古く、明治18年6月版權所有とある。交詢社や慶應義塾の仕事が忙しい中で、数式が羅列する実用書の翻訳に取り組んだ意図はどこにあったのか。直後、あるいは並行して歴史教科書を執筆していることと内在的な関連が見いだせるのかという課題も浮かんてくる。

第5巻には他に、小幡差出書簡162通を収録した。発信年月日順に並べることが、読者の利用に供する考えたが、年代推定に時間を要することを考えると、宛先別に編集を進める必要があった。書簡を収集していると、国公立の資料保存機関であっても、知名度の低さから、小幡は馬次郎、芳次郎、守次郎などの名前で目録に登場する。この巻が呼び水となってさらに収集が進めば、小幡独特の書き癖もより正確に読むことが出来よう。巻末には発信年月日順の一覧を付した。年末詳のものも、もう少し時期を絞ることが可能であると考えている。

『小幡篤次郎著作集』も残すところ、年譜と索引、若干の参考資料を収録する別巻を残すのみとなった。多くの方に手にとっていただけるよう、小幡の魅力を伝えていきたいと思う。

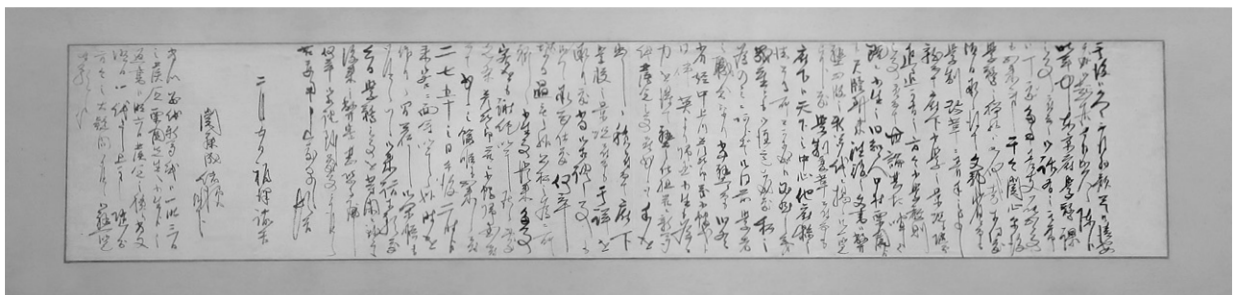
新収資料紹介

令和6(2024)年4月から9月までの間に、福沢研究センターに収蔵された資料の一部を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきながらすべての資料をご紹介しますが、この場をお借りして御礼申し上げます。

■関藤成緒宛福沢諭吉書簡 明治11(1878)年2月5日付 1面

【松下たえ子氏寄贈】

関藤成緒は弘化2(1845)年備後福山藩で生まれ、明治2年8月慶應義塾に入塾(「入社帳」では大友平五郎名義)。明治4年の卒業後は文部省に入省。明治7年にいったん辞職するも、明治13年には再び出仕。書面中にイギリスに留学していた中上川彦次郎が小幡篤次郎と「旧冬」に帰国したと書かれていることから(両名の帰国は明治10年10月)、明治11年ものであることがわかる。この頃の関藤は東京府御用掛(学務課担当)。福沢諭吉は今日の学務が等閑になっていることを心配し、関藤へ近いうちに直接会って相談したいと伝えている。



■印東玄得宛福沢諭吉書簡 明治24(1891)年4月27日付 1通

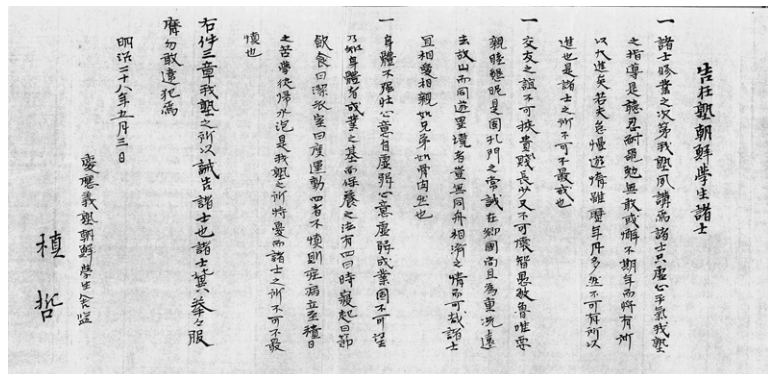
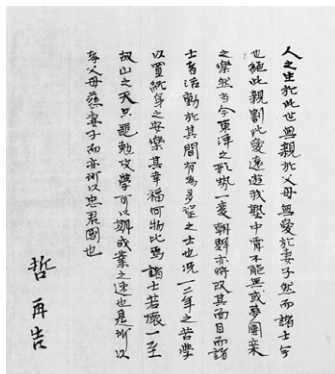
【購入】

福沢諭吉が印東玄得に三女俊(しゅん)の病状を報告するとともに、不調が続く俊を箱根湯本へ湯治に連れ出してもよいか尋ねたもの。印東は嘉永3(1850)年江戸の商家に生まれ、その後印東家の家督を相続。慶応3(1867)年12月慶應義塾に入塾。明治4年大学東校に入学。明治9年同校の課程を終え、東京大学医学部下医(助手)、その後助教授、第二医院副長を務める。明治14年には阿部泰蔵等と明治生命保険株式会社を創立させ、医長となった。明治19年大学を退職。家庭医の印東の来診に謝意を伝えながらも、父親として一向に調子の戻らない娘を心配する福沢の様子がよく表れている書簡である。『福沢諭吉書簡集』第7巻(63～64頁掲載)刊行時には、校訂ができていなかった。

■告在塾朝鮮学生諸士 明治28(1895)年5月3日付 1巻

【購入】

慶應義塾朝鮮学生舎監植哲による三カ条の誠告文である。植は慶応2(1866)年長岡藩に生まれ、慶應義塾に進学していた兄武を頼って明治16、17年頃に上京。明治23年7月、別科卒業。卒業後は舎監として6年務めた。その後、北越鉄道や王子製紙を経て、台湾の塩水港製糖会社に入社すると、大正6(1917)年に社長就任。この誠告文では慶應義塾に当時多く在籍していた朝鮮人留学生に向けて、「諸士修業之次第」、「交友之宜」、「身体」の「強壯」について留意すべきであると説いている。



(文責 岡部敏和)



日本で韓国語を学ぶこと

韓国 啓明大学教授 ミン キョン モ 閔 庚 模

慶應義塾との縁は2005年に遡る。三田キャンパスの外国語学校で4年間韓国語を教えた。その後韓国に戻り2009年から韓国語教育学科に勤務しながらも、韓国語教育現場といえば今も慶應義塾外国語学校を思い出す。

20年が過ぎ、昨今日本で韓国語を学ぶ人びとが増えているのを見ながら、かつては思い至らなかった2つの質問を、自らに問いかけるようになった。1つは「当時どのような変化があって、私は外国語学校で韓国語を教える機会を得ることができたのか？」であり、もう1つは「日本で韓国語を学ぶということは、どのような意味を持つのだろうか？」である。

最初の質問に対する自身の答えは、「韓国語を学ぶという需要が、日本にそれだけあった」からである。学習者がいなければ教授者は存在せず、結局教育現場はない。

当時は1998年から2004年に行われた韓国による日本文化開放、2002年韓日ワールドカップ、2004年NHKで放映された「冬のソナタ」などの影響により、韓国に対して友好的な雰囲気形成された時期で、日本社会にいわゆる「韓流」が一つの現象として現れていた。

そのような社会的雰囲気の中で韓国語学習の需要が増し、三田キャンパスの外国語学校でも、目的を尋ねれば、多くの受講者が韓国ドラマと映画についての話をし、近い国なので韓国文化を知りたい、韓国人や在日の友人がいるから韓国語を学びたいという答えが主流を占めた。

語学の教育現場を生み出す時代的背景と、韓国語学習の目的とには必ず関係性があるという考えは、二番目の質問への答えにつながった。すなわち韓国語を学ぶということは、個人の自己啓発という次元を超え、両国関係に意味を与える。

日本での韓国語教育の始まりを考えると、先の受講者たちの目的は一般的ではない。まずは、通訳者養成という、専門的かつ限定的な目的であったからである。1872年(明治5年)に対馬厳原に設置された韓語学所は、それまで対馬藩が担当していた対朝鮮外交の通訳官養成機能を継承した。明治政府はそれを外務省に移管し、1880年(明治13年)東京外国語学校の朝鮮語学科の設置につながった。

その後も長い間、日本での韓国語教育は、行政、軍事、外交、通商、宗教などに関するいわゆる「言語エリート」教育に限られていたといえる。それだけ韓国語の需要は限定的で専門的であった。この需要の性格上、当時朝鮮語教育の施行、中断は韓日関係に影響を受けることになった。1875年雲陽号事件、1876年朝日修好条規締結など朝鮮に対する日本の影響力が強化された時期に朝鮮語教育が始まり、1882年壬午軍乱、1884年甲申政変、1895年

乙未事変後の対朝鮮影響力弱化時期に朝鮮語教育が中断されたのは、決して偶然ではない。

慶應義塾朝鮮語学校の設立と廃止もまた、韓日関係の影響を受けた。『慶應義塾百年史』中(前)巻(慶應義塾、1960年、pp.143～145)は、朝鮮語学校の設立が1894年7月の日清戦争の勃発、10月の特派全権大使井上馨の朝鮮派遣、慶應義塾に留学した朴泳孝、兪吉濬が朝鮮政界で要職を占めるようになったこととの関連を明らかにしている。当時の新聞には、慶應義塾以外にも朝鮮語講座を開設した多数の学校や団体による募集公告が掲載されている。大阪の東洋専門学校(東雲新聞、大阪毎日新聞1889年(明治22年)3月4日)、英学院(朝日新聞1894年(明治27年)11月29日、1895年(明治28年)1月27日、2月28日、4月3日)、朝鮮語研究会(朝日新聞1895年(明治28年)2月22-24日)、福音会英語夜学校(朝日新聞1895年(明治28年)2月24-27日)、私立外国語学校(朝日新聞1895年(明治28年)5月31日)などである。しかし慶應義塾朝鮮語学校はほぼ1895年7月までという短命に終わり、それは1895年5月の三国干渉(三国干渉)以後、朝鮮に対する日本の影響力弱化と時期的に合致する。他の朝鮮語講座の受講生募集広告も姿を消した。

その後、朝鮮語教育はかなり限定的になる。1942年(昭和17年)慶應義塾に外国語学校が設立されたが、朝鮮語講座は開設されなかった。これも時代状況と関連があろう。『半世紀の歩み』(慶應義塾外国語学校、1992年)によると、最も在籍者の多い言語はインドネシア語で、同年10月英語の在籍生68人に対し271人を数えた。当時の学則には、外国語学校の設立目的は、慶應義塾の学生だけでなく一般人を大東亜共栄圏および隣接地域の諸事情に精通させ、海外発展に一助となすこととあり、言語教育がどれほど時代状況に敏感に反応したのかわかる。

上記の時期を経て韓国語教育あるいは学習は、1965年の韓日基本条約以後、新たな転機を迎えることになる。慶應義塾外国語学校に朝鮮語講座が開設されたのも、この時期である。1963年大阪外国語大学で韓国語市民講座の運営が始まったが、1973年の慶應義塾外国語学校での一般人対象講座の開設は、日本の韓国語教育史上かなり早い時期に属する。同年4月初級、10月に中級、1974年4月に上級が開設された。(前掲『半世紀の歩み』、p.126、p.133)

多くの大学に韓国語学科が開設され、NHKでは韓国語講座が始まった。このような変化を通じてわかるのは、韓国語教育が政治的目的の言語エリート教育から、

就職、留学、学問など個人的な目的を持つ一般人対象の言語教育に変化したという点である。すなわち、韓国語学習の主導権が国家から個人に移譲され、道具的動機（instrumental motivation）を持つ個人が韓国語を学習し始めた。

『慶應義塾外国語学校略史』（慶應義塾外国語学校、1958）の序で岩崎良三は「この外国語学校はあくまでも町人の学校でなければならないと思う」と述べる。「町人の学校」という表現は、外国語学習の主体が変化したことを端的に示している。

以後1988年ソウルオリンピックを起点に、韓国語学習者の底辺は拡大し、日本での韓国語教育は再び転機を迎えた。2000年代初めの韓国語学習動機に言及したが、韓国語学習はもはや目的指向的な行為ではなくなった。つまり、実用的な目的で韓国語を学ぶのではなく、韓国語を使う人々の文化を知り、その文化に属しようとする

統合的動機（integrative motivation）を持つ日本人学習者が大幅に増えたのが、2000年代の変化といえる。

韓国語教育と学習が目的志向的行為であった過去を見れば、このような変化は韓日両国の歴史においてかなり重要である。日本語に照らして韓国語を理解し、日本文化に照らして韓国文化を理解することを享受する日本人が増えたことは、韓国語と日本語が相互両国において「拡張（または発展）」の言語で、「交隣」の言語に変化できることを示すものと考えられる。

交隣というのは、相手を一方的に理解するのではなく、私と相手を両方とも理解することを意味する。相手を知って私を知るということであり、私を知って相手を知ることである。それだけ「趣味で韓国語を学ぶ一般市民」が与える含意は、韓日両国関係で大きなものであると思う。

（訳：西沢直子）

主な動き

■ 福沢研究センター講演会

6月27日（土）14時45分から東館6階G-Labにおいて、昨年9月より1年間訪問教授として来ていただいている関庚模韓国啓明大学教授による講演会が行われた。演題は「韓国語と日本語、どこが違うのかー認識と発想の相違」で、講演は韓国語で行われ、姜兌允氏が同時通訳を担当した。

参加者は20名前後だったが、予定の終了時間を大きく超えて活発な質疑が行われた。10、11ページ掲載の関先生の随筆はご講演内容の一部である。



■ 未来先導基金代替イベント

8月29日（木）～31日（日）、当センター主催で未来先導基金プログラム「福澤諭吉と近世の街を「体験」する旅ー城下町中津で学ぶ2泊3日ー」を引率教員4名、参加学生生徒23名で実施する予定であった。しかし、九州地方に台風10号が直撃、交通機関なども運休となり、中止を余儀なくされた。台風の影響は関東にはほとんどなかったため、希望者を募り、8月29日三田キャンパス南校舎466番教室で、教員4名学生生徒14名の参加により、机上、映像等による中津市の街歩き体験や、三田演説館、

塾史展示館の見学が行われた。参加者から多くの発言もあり、楽しい交流の場となった。

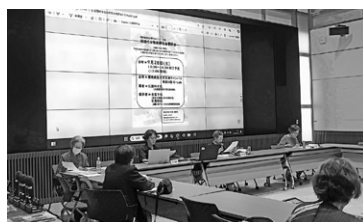


■ 梨花史学研究所との部局間協定の更新

2014年7月に締結され、5年ごとの見直しとなっている韓国梨花女子大学校梨花史学研究所との連携協定の2回目の更新が、7月24日付で締結された。今回は文書のやり取りによる更新となった。

■ 近現代女性史研究会書評会

9月28日（土）に当センター共催で、三田キャンパス東館6階G-Labにおいて、広瀬玲子氏の著作『植民地朝鮮の愛国婦人会ー在朝日本人女性と植民地支配ー』（有志舎、2023年）の書評会が行われた。書評者は東京外国語大学名誉教授金富子氏と高麗大学グローバル日本研究院研究教授宋惠敬氏であった。参加者は少なめであったが、活発な討論が行われ、有意義な会となった。



福沢研究センター諸記録（2024年4月～2024年9月）

■ 諸会議

- *2024年度執行委員会（4月4日、5月9日、6月6日、7月4日、8月1日、9月5日）
- *『小幡篤次郎著作集』編集委員会（6月10日）
- *『小幡篤次郎著作集』刊行委員会（6月13日）
- *2024年度第1回福沢研究センター会議・慶應義塾史展示館所員会議（6月19日）
- *2024年度福沢研究センター運営委員会（7月17日、8月2日）
- *2024年度塾史展示館運営委員会（7月17日）
- *『近代日本研究』第41巻編集委員会（8月23日、9月30日）

■ 人事

- <訪問教授> 関庚模（啓明大学教授）
2023年9月1日～8月31日
- <事務局> 新任 長谷川陵（非常勤嘱託） 5月1日～
退職 渋谷彩佳（事務嘱託）～9月30日（期間満了）
退職 柄越祥子（非常勤嘱託）
～4月30日（期間満了）

■ 主な来往

- *都倉、歴史オペラ制作委員会（北里柴三郎オペラ「ドンネルの夢」プロジェクト）来訪対応（4月4日）
- *横山、森鷗外記念館対応（4月10日）
- *都倉、秋企画展打ち合わせのため市川卓広氏来訪（4月11日）
- *都倉、村林誠氏対応（4月18日）
- *都倉、横山、今村信男氏訪問（4月24日）
- *都倉、鈴木博道氏来訪（4月26日）
- *都倉、横山、三田サッカー倶楽部対応（5月22日）
- *都倉、木原進氏対応（5月24日）
- *西沢、横山、韓国漢陽初等学校教員案内（演説館、展示館等）（6月6日）
- *都倉、野口有佑美氏来訪（6月18日）
- *都倉、門野恭一氏来訪対応（7月3日）
- *都倉、飯田茂樹氏対応（7月3日）
- *平野、都倉、久我、日本赤十字学園対応（7月19日）
- *都倉、横山、大日本蹴球協会杯借用・返却でJFA blue-ing 訪問（8月1日、9月2日）
- *都倉、港区郷土歴史館対応（8月19日）
- *都倉、三田文学関根編集長対応（8月19日）

■ 取材対応

- *都倉、NHK 取材対応（戦争と大学）（4月5、12日）
- *都倉、東京新聞加古陽司氏取材対応（学徒出陣関係）（4月15日）
- *都倉、『江戸染』取材対応（福沢関係）（5月16日）
- *都倉、読売新聞取材対応（塾生出陣壮行会の写真）（5月22日）
- *都倉、毎日新聞取材対応（戦争展関係）（7月2、24日）
- *都倉、NHK 企画展取材（7月11、24日）
- *都倉、日経新聞取材対応（8月7日）
- *都倉、NHK 取材対応（偉人の年収）（8月7、19日）

■ 出張・見学

- *西沢、中津市出張（4月16～18日、5月27～29日、8月8～10日）
- *西沢、東京海洋大学図書館調査（7月1、25、31日）
- *西沢、横浜市立中央図書館調査（7月10日、8月21、22日、9月4日）
- *都倉、藤山一郎遺族宅訪問（7月18日、8月26日、9月3、6、24日）
- *都倉、門野幾之進記念館展示相談のため鳥取出張（8月5～6日）
- *西沢、仙台市博物館および東北大学出張（9月18日）

■ 講師派遣

- *西沢、信濃町新任職員オリエンテーション（4月1日）
- *都倉、研修医・専修医オリエンテーション（4月1日）
- *都倉、一貫校新任教員研修（講演・座談会）（4月3日）
- *西沢、新任職員研修にて講演（4月5日）
- *都倉、中部部新入生向け講演（慶應義塾で何を学ぶ）（4月10日）
- *都倉、奈良三田会にて講演（慶應義塾の学風）（4月20日）
- *都倉、東アジア文化交渉学会報告（私塾比較）（5月11、12日）
- *井奥顧問、ウェーランド記念講演会にて講演（5月15日）
- *都倉、日本セカンドライフ協会にて講演（学問のすゝめ）（5月29日）
- *都倉、「博物館学実習」出講（三田キャンパスの見方）（5月31日）
- *都倉、KeMCo 講座出講（福沢研究センターについて）（6月12日）
- *都倉、SFC 中部部1年生道徳授業（福沢論古とお礼）（6月13日）
- *都倉、所沢三田会総会にて講演（慶應野球の歴史）（6月16日）
- *都倉、慶應技術士会総会にて講演（慶應義塾における工学教育の誕生）（6月22日）
- *都倉、船橋三田会福沢精神研究会にて講演（戦時中の福沢論）（6月23日）
- *都倉、戦争遺跡としてめぐる慶應義塾のキャンパスツアー（7月18日）
- *都倉、日吉台地下壕見学会（7月25日、8月3日）
- *都倉、日吉台地下壕保存の会向け三田キャンパス見学会（7月29日）
- *都倉、韓国啓明大学学生向け講義、キャンパス見学会（7月31日）
- *西沢、上野所員、中津アーカイブ講座にて講義（8月26～30日）
- *都倉、長野三田会例会にて講演（9月14日）
- *都倉、港区平和都市宣言40周年事業参加者対象講義（9月21日）
- *都倉、学生部主催三田キャンパスツアー（9月26日）

■ その他

- *都倉、メディアコム会議（4月3日、5月8日、6月14、28日）
- *都倉、港区平和都市宣言40周年記念冊業者選考委員会（5月8日、6月14、28日）
- *西沢、国際センター運営委員会（5月16日、7月18日）
- *都倉、17大学広報責任者会議見学対応（5月17日）
- *都倉、KeMCo 編集委員会（5月23日、7月11日）
- *都倉、パレット倶楽部創部125年記念祝賀会（5月25日）
- *西沢、福沢旧邸保存会評議員会（5月28日）
- *都倉、幼稚園創立150周年式典（5月30日）
- *都倉、港区文化財保護審議会（6月4日、9月4日）
- *都倉、日吉キリスト教青年会館保存修理打合せ（6月26日）
- *関訪問教授、福沢研究センター講演会（6月27日）
- *都倉、日銀本店での最終番号券贈呈式に同行（7月3日）
- *西沢、都倉、KeMCo 運営委員会（7月12日）
- *西沢、メンタリングプログラム（7月19日、9月9日）
- *都倉、北里研究所、新日本銀行券発行記念式典（7月21日）
- *都倉、久我、未来先導説明会（7月29日、8月7日）
- *西沢、中津市女性起業家支援セミナー（8月9日）
- *都倉、時事新報株主総会（産経新聞社、8月28日、9月11日）
- *都倉、未来先導基金プログラム（8月29～31日予定）の台風中止の代替行事実施（8月29日）
- *都倉、メディアコムゼミ合宿で青森県青森市（9月16～18日）
- *近代現代女性史研究会共催書評会（9月28日）

慶應義塾福沢研究センター通信 第41号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2024年10月31日（年2回刊）
編集 慶應義塾福沢研究センター
発行 〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1604
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印刷（有）梅沢印刷所